

方向

第六七号 一九八七年五月二五日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

南山大師の戒律観 (一一一) 赤谷明海

〈本論 第三章 第三節 四種戒要〉第四項 戒相と持犯 附懺悔

既に述べた如く、戒相を行に約せば美徳光顯せる行持の相であり、法に約せば戒本たる五篇七聚の条目であるが、元來法体行相の四科は、

「由法成体因体起行行必提相」(『資持記』卷十五・統・69・257・左)

の關係にあり、かかる意味の事は南山も諸処に散説してゐる。元照は更に、

「当知相者是法相復是体相又是行相無別相也。」(同前)

と言ひ、又

「法無別法即相是法体無別体總相為体行無別行履相成行」(『資持記』卷十七・統・69・277・左)

と言つて戒相を離れて他の三なしとするが、ただ戒相のみが他の三を攝するばかりではあるまい。南山の所謂隨法の行、受体即隨行等より見ても、戒行の中にも他の三を収め、更に戒法・戒体を夫々他を攝する關係にある事を知るのである。が然し實際行持の準則となる意味に於いて戒相は特に重視されるが故に、斯く戒相に於いてのみ他を攝せしめて論ずるのであらう。

以上の如く、戒相を広義に解する事も出来るが、今当面の問題となるのは五篇七聚の戒条たる狭義の戒相に就いてである。此の条数に関して『智論』（『智度論』卷五十五・正・25・772・c 参照）の説を引き、

「智論云。若但名字則二百五十。毘尼中。略說則八万四千。広說無量無辺」（『事鈔』卷中・正・40・50・a）

と言ひ、戒体を論ずるに際しても、

「論体約境実乃無量。戒本防惡。惡緣多故。免戒亦多。故善生云。衆生無量戒亦無量等」（正・40・52・a）と無量の戒や律や儀のある事を言ふが、斯様な事は實際行法の上に於いては極めて抽象的であり、行者としては依つて以てその行為を律すべき準則がなくてはならない。茲に

「語相而言。有境斯是。緣則綿亘攝心通漫。今約戒本人並誦持。文相易明持犯非濫。自余万境豈得漏。」（『事鈔』卷中・正・40・54・b・c）

と戒本に準則を求める所以がある。かかる準則たる戒相には五八十具等の別があるが、就中 重要なのは具足戒（Upasampanna）であり、名の如く戒品を具足し一定の条件を具備した者にしてはじめて受け得る出家戒であり、この戒品の数に就いては諸律によつて異なるが、今『四分』によつては比丘（Bhikkhu）に二百五十、比丘尼（Bhikkhuni）に三百四十八を数へ、前者は波羅夷（Pārājika 不共住）四、僧伽婆尸沙（Saṅghāvasēsa 僧殘）十三、不定（Aniyata）二、尼薩耆波逸提（Naihsargika - pāyattika 捨墮）三十、波逸提（Pāyattika 單墮）九十、波羅提提舍尼（Prati - deśanīya 悔過）四、衆學（Saikṣadharmā 苾芻學）百、滅諍（Adhikarāṇa - śamatha）七、と八種に割り

当て、後者に於いても波羅夷以下同様八種に夫々配当せしめる。南山にあつては波羅夷・僧伽婆尸沙・偷蘭遮・波逸提・波羅提提舍尼・突吉羅の六聚を用ひる事が多いが、波逸提は捨墮單墮を合せるもの、突吉羅(Duskrta)は衆学・不定・減諍の総名、偷蘭遮(Stūlātva)は波羅夷・僧殘に於ける未達罪等の諸罪を言ひ、或は戒分所収の罪として重く見られ、或は威儀分所収の罪として軽く見られるものである。この六聚とは別に五篇(南京律にあつてはゴヒンと云ひ、北京律にあつてはゴヘンと言ふ)七聚の名が一般に親しまれてゐるが、前者は波羅夷・僧殘・波逸提・提舍尼・突吉羅の五、後者は五篇に偷蘭遮と惡說(Durdhāsita)との二を加えたもの、但し惡說とは突吉羅を惡作惡說の二とし、惡作を単に突吉羅として惡說を別出したものである。

かかる五篇六聚七聚に屬する一々の相に関しては『戒疏』及び『事鈔』隨戒篇に詳論せられてゐるが、要するところ、

「篇聚者撰化之大科擬斷之網格并業輕重定報淺深」(『資持記』正・40・253・a)と云ひ、

「五篇明犯・違犯持行自成。七聚彰持。順持諸犯冥失。」(『事鈔』卷中・正・40・46・b、正藏の句点を變更す。)

とある如く、持犯輕重を判じ、行に依憑あらしめる事が戒相の中心問題である。

この持犯に関しては既に戒法の項下に於いて少し論及したが、『事鈔』卷中・持犯篇の最初に、

「律宗其唯持犯」(正・40・91・a)

と戒律の宗致は行者持犯の方軌にある事を言ひ、前篇たる「随戒篇」に、所犯境・成犯相・開不犯法の三に約して持犯の實際を知らしめ、今この篇に於いては更に義に約してその綱要を総論してゐるが、先づ持犯の名字として止持作持止犯作犯の四を挙げ、次いで此の四行の体状・成処・通塞・漸頓・優劣等に亘つて説き、以て開解立行の方軌たらしめてゐる。この持犯篇によつて南山が如何に罪過の輕重を判じてゐるかを窺ふ事は重要であるが先に一言した事でもあり、今それを詳かにする余裕がない。ただ從來小乘に於いては大乗程意業に重きを置かないとされ、それは或程度まで認められる事であるが〔註〕、「隨戒」「持犯」の二篇を一覽しても、如何に南山が動機の心相を重要視してゐるかが明らかである。

〔註〕「事鈔」卷中持犯篇にも「如内心淫意身口未現。名違方便。此犯吉羅。故文云。或發心作心念作也。若爾与単心何別。答律制動身口思心。名為期業。若単心者。制限大乘故。善見云。凡人恒緣欲境。聖人若制心戒者。無有得脫之期。故律中起心不動身口。但自剋責還復好心。是名不犯。」（正・40・94・D）と小乘に於いても三業中意業に關説し、身口を動ずる思心たる期業は違方便として制するが、単心を制しないのは大乘と異なつてゐる事を言つてゐる。

一体大乘律にあつては兎角宗教律が道德律と結び付く度合が濃厚であり、小乘律に於いては法律的要件が多分に介入してゐる。従つて前者にあつては意業を重視する傾向が多く、それがためにややもすれば形式を蔑視して放縱に流れる危険性があり、後者にあつては身口を重視する關係上、兎角それに拘泥して内心を没却する可能性が多い。両者共に一長一短、意のみに偏すれば流れ易く、身口に偏すれば固まり易い。そこで両者の欠点を補ひ、

小乗の法律的条目に標準を求め、大乘的精神によつてそれを運用せんとしてゐるところに南山の意趣があると考へるのは根拠のない事であらうか。

次に懺悔に就いて附言すれば、『事鈔』巻中に、

「得知因果輕重犯不犯相。方得入懺法。」（正・40・95・a）

と言ひ、戒相により、犯不輕重の相が明かとなれば、それに従つて犯者は断罪せられるが、彼は発露懺悔する事によつて妄を除き、身心清淨となつて僧法に同ずる事が出来る。蓋し犯不輕重の判定は罪過を意識せしめる標準であり、懺悔は意識反省せる罪過を滅せんが為の方法であり、惡を転じて善を成じ、一大勇猛心を起して仏道を直進せしめんがための慈悲の方便である。この懺悔は積尊以來特に重視された行事であり、仏教に於ける代表的会式たる布薩自恣の上に就いてもその事情は明らかである。従つてそれは、後世支那に於いても種々の形に於いて論議実践の対象となつた事であらうし、事実南山当時既に支那人の手になる悔法も數種存してゐた（註）。

（註）例へば僧鑑・曇諦、及び願師の『羯磨』（『資持記』卷十一・統・69・228・左、同卷廿八・統・69・421・左）或は慧光の『羯磨』（『事鈔』卷上・正・40・42・a）又布薩に關してではあるが、齊文宣王、及び普照、道安の著（『事鈔』卷上・40・34・b）等。

戒律者としての南山にとつては、勿論懺悔は大きい問題であり、諸所に自己の意見を發表してゐるが、例によつて古来の諸説・法式を綜合集大成し、以て仏意に契ふ決定的準則を産み出さんとし、『事鈔』巻中懺六篇には

「然遂古之師。並施悔法增減隱顯。臆說者多。照教無文檢行違律。」（正・40・96・a）

と言つて、律教律制の本旨に則り、従来の謬説を正さんとの態度を示してゐる。彼の説に依れば、先づ「事鈔」卷中に、

「今懺悔之法。大略有二。初則理懺。二則事懺。此之二懺通道舍俗。若論律懺唯局道衆。」（正・40・36・
a)

と化制二教の懺ある事を言ひ、化教の理事兩懺は道俗の通法、制教の懺法は出家の別懺とし、就中化教の理懺は利智の機に屬し、而もその智の強弱によつて妄の本性無生なるを觀ずるのに差があり、

「然理大要不出三種。一者諸法性空無我。此理照心名為小乘。二者諸法本相是空。唯情妄見。此理照用屬小菩薩。三者諸法外塵本無。實唯有識。此理深妙。唯意緣知。是大菩薩仏果証行。」（正・40・36・b)

と三觀の判を出し、この三理を以て各人の機根に任せ事に随つて緣を觀ずれば罪としと違らずと言ふ事がないと言ふ。次に事懺の機は尚一段劣つた愚鈍の人で誦誦札拜讚嘆等の事行によるものとし、

「若論事懺屬彼愚鈍。由未見理。我倒常行妄業。…為說真觀心昏智迷。止得嚴淨道場。稱歎虔仰。或因札拜或仮誦持旋繞。竭誠心緣勝境。」（同前）

と言ひ、且つ理事兩懺と罪福道三業の關係を述べ、

「然則事懺罪業福是順生。理懺妄本道則逆流。一出一入。條然自分。愚智兩明。虛實雙顯。」（註）（同前。句点変更）

（註）三業に關しては『釈門掃敬儀』卷上に「窃聞泥洹法域入有多門。万行雖殊宗掃捨著。但以罪業違理一

向不行。福業順生觀時修捨。出世道業由来未經。故須專志不容寧捨。經雖廣說不出此三約理求文斯皆統攝」
(正・45・861・b-c)とあるを参照。

と言ひ化教通懺の理事兩懺は、機に約して違理業道の罪を懺すべきものであるが、律懺は然らず、

「律中犯相並託因縁。為罪居六聚懺法又別。不同化教但論成業。結犯已外無論違制。」(『事鈔』正・40・94・b)

の如く、犯戒犯律の違制の罪は制教別懺により、戒相に順じて懺せねばならずとし、茲に六聚の罪により六位に大別してその一々の懺法を出してゐるが、今最重罪たる波羅夷の懺法を見ても、宗として『四分』に依る結果、懺悔によつて償ひ得ない形式的処分を一往肯定してゐるが、常に合理的観点からも律文を解し、例へば『業疏』
卷四に

「就律中懺重之相雖非即數有可收理」(統・64・501・左)

と言ふ如く、淨用に充てるか否かに関しても懺者の心を重視し、眞の懺者には寛大にその生きるべき道を与へてゐるが、

「須通融心不爾晨夕直在仏前低頭妄懺心多無記更增慢習不如不作。」(同前)

と仮令形式的には如何に懺悔しようとも、自覚反省なき懺悔はむしろ作さざるにしかずとし、罪の大小よりも懺心の大小を問題にしてゐる。斯の如きは常にその思想の根柢に『涅槃』等の精神を有してゐる南山の特色ある見解の一斑であらう。

孤山雁信

— 赤谷明海書翰集 —

(一一一)

原田憲雄編

★1977.4.24-9? 井村千鶴氏宛。墨書。封筒に「弔歌 井村千鶴様」と記し、手渡されたもの。〈註〉参照。

謹 悼

たらちねの母をいざなひ ははそばの母もうべなひ 寺田なる家をせましと そのかみの巨椽の池を 見はるかす眺よろしき 南陵の町に移れば おもひきや 母はうせにき とことは母とさかりき ひとりしていかに過ごさむ 広き屋の いやひろびろし ひとりゐの いやさむざむし むらぎもの心くだけで 泣きになくおみなご あはれ

涙堪へて立居つましきおみなごの喪服のかけに白き山吹花

明 海

〈註〉赤谷明海日記の同年四月二四日と二九日に、この悼歌に関連する記事がある。紀美子夫人の示されたコピーにより、左に写しておく。

母と二人で寺田に住んでいた井村千鶴が南陵町に移転したのが四月の三日か四日だったらしい。移ったとたんに母が悪く、病院にも移せず、家で酸素吸入をしているとの話をきいた。近くのことなので犬をつれて見舞いに行ったのが八日の夕方、やっと捜し当てた家は大きな家だった。門前の立話だけで入るのは遠慮したが、もうだめかもしれないと深刻な顔だった。移ったばかりで電話がつかず、医者への連絡に自転車で公衆電話にかけつけるとのこと。リンゲルのとりかえの連絡である。

病人はさておき、看病者の疲労が気になって一日おいた十日に伊勢田北山の姉の家へ電話したら、小康状態な

ので昨夜は安心してねましたとの返事だった。

その後千鶴女史が半日ほど出勤してきたが、必要量のリンゲルが吸収できないような状況だとの話を耳にしたところ、十九日になって今夜お通夜だとのこと。とうとうだめだった訳で、新居へ死にに來たようなことになってしまった。

その日は旧図書館係のお別れパーティーを大三元とするよう予約してあったのでお通夜法要には参れず、翌二十日十一時からの告別式に出かけた。場所は兄の家の近くの真導寺であった。白山吹の花が咲いていた。

靈柩車を見送るまでいたが、その間、めずらしい人々と久し振りに顔を合わせた。……（四月二四日）

先日移転したばかりの家で母をうしなつた井村千鶴のことが氣の毒でならず、通勤の車中で挽歌をひねっていたが、これというものができなかった。先週の日曜の夜だったか、家内がお別れの挨拶の原稿書きをしながら泣いているのを見て、一気に次のような長歌を仕上げ、月曜から出勤した井村氏に贈った。 たらちねの……

右のはじめに 謹悼 の二字を置いた。（四月二九日）

★1980.1.1. 同氏宛。印刷年賀状に墨書添え書き。

また一ツ お歳を召され御目出たい事でございます

★1982.1.1. 同氏宛。印刷年賀状に墨書添え書き。

雪はフウワリと積らせておくもの、わざわざお尻で固めに行く必要はないと思いますが

★1983.1.1. 同氏宛。印刷年賀状に墨書添え書き。

新玉の年のはじめのひとりゐのさみしくまさばたづねてきませ
の程お待ちしています

四日の午後三時頃から恒例の新年会、御来駕

★1984.1.1. 同氏宛。印刷年賀状添え書き。

四日の御来臨 期待しております（午後三時）

★1941.8.6. 原田憲雄宛。葉書。

・ 兄帰る今日と幼き妹等が立てし花なり甘百合の花

・ 幼ながら幼ながらにわがうちのいぶせ見せじと活けし甘百合

・ 先づ上れ友等招じぬ奥の間は床にほていのすすけたるあり

・ あまゆりは白き水盤に盛られたりすすけいぶせき賤が床の間

・ ご批判を乞ふ。久し振りの歌なり。歌の事を考へてゐるといつらうつらと眠むけがさす、今日も昼寝から寛めたのが四時。

・ 大辞典枕に敷きてその固き気にはかけつつ眠り入りしか

・ 情性にて更に読書ならず、その代り至つて健康。

・ 故郷の事、頭を去らず 何時もの事ながらこれがわだかまつてゐる間は本も読めない。土用の明ける頃になつてやつと盛夏らしい天候。暑いには暑い。これもいい。暇なれば昼寝に来られよ。明七日は八幡行。六日夕、

コレヲ書イテカラ貴兄ノ端書ヲ見タ、何時デモ来ラレヨ。へこの年八月二十日から二十七日まで、赤谷君の好

意で、原田は法金剛院の一室を借り卒業論文を執筆した。ここの「端書」はたぶんその依頼だった。

★1941.8.28. 同宛。葉書。墨書。

昨日はお送りをせず失礼仕り候。在寺中は嘸不愉快な事も多かつたらうと思ひます。偕て貴兄にお渡しすべき本がありますのでお参りの帰りにでもお寄り下さい。そのうち外出のついでがあれば小生がお届けします。加藤へ一嶺へも帰洛、昨日はそれで東福寺行、ついでに博物館に寄つた。

子等建てしぎすの墓標は色さめて秋そくそくと深みゆくらし

右御知らせまで 乱筆御免 二十八日

★1941.8.30. 同宛。手紙。墨書。

葉書拝見した。//神を疲らせる。//嘲る。//生甲斐。//喧噪。//眼をつぶらう。//今日のいとなみを
礎かう。//みだらに踊る。//結構な詩人の神経だ。俺は堅実そのものだ。テコでも何でも近頃の俺の盤固た
る神経をさう易々と動かす事は出来ない。かくも金石の如き固き神経に反比例して何と俺の読書力の弱々しい事
よ、南山が泣いてゐる事だらう。草抜きの試験でもない事が、何はともあれ余り神経をいらだてて胸痛ましむる
事のない様に。余り痛む様なら俺の知合の歯医者に紹介してやる。

昨日のカステラがまだ胸につかへてゐる。余程執念深いカステラだ。胸すかしのつもりで持って来てくれたのだ
らう。岡山の梨は、カステラを木にならした様な逸品。いやはや有難くしがんだ事だ。

帰郷まで二三日。今度は気兼ねもいらすずに帰れると思つてゐたが、矢張り気になるものがある。俺にもこのやう

な神経はある 正に岡山梨のカスカスの汁の如き。三十日朝 めいかいより 撲尻兄殿

★1941.9.4. 同宛。葉書。差住所は奈良県宇智郡野原町大字野原、すなわち赤谷君の実家。

二日の晩予定より後れて九時頃此方に着いた、昨日早速手紙を書き出したのだが、今年二つになる兄の子が帰つてゐて、手あたり次第とつて投げ、おまけに机の上へのぼつて来て邪魔をするので、ついに断念した。今日は端書で失礼する、予期してゐた盆も今年は新へ暦ですましたとの事に少々悲観したが、稲の葉末の朝露や金剛山の夕風等、定型的ながら、貧しい帰郷者には十分の慰安とはなる。農家は今は暇で、この暇な間に晩秋の蚕をあげる事になつてゐる、稲の穂がそろそろ出て来た。二百二十日の走り穂と云ふのださうな。母親のしりからついて蚕の世話をしてゐる、時には自ら進んで養蚕の方法等をきく、俺もヨイコドモになつたものだ等といふ自嘲的なものの声がきこえるがそれはすぐ押し殺す、今日は歌の材料をさがしがてら葛城の山奥へ行く。四日朝

★1941.9.19. 同宛。葉書。『幻の葡萄』第一卷一四四頁。

★1941.10.5. 田中千美宛。葉書。『幻の葡萄』第一卷一六一頁。

★1941.10.14. 同宛。手紙。封筒、墨書。『幻の葡萄』第一卷一六五頁。

★1941.10.16. 同宛。手紙。封筒、墨書。『幻の葡萄』第二卷後書三一頁。

★1941.10.17. 原田憲雄宛。手紙。封筒、墨書。一神舎（大塚五郎先生を中心とする文学団体）歌会詠草。

菴羅樹の花咲く朝の多武峰やしろの栓皮湯氣立ちけむる

久しくも忘れてゐしかこのにほひ昔田の辺につばなつみしが

若葉せる襟の丘辺麦畑のだんだん畑に落つむわらべ（石舞台附近）（下句一案）麦畑に落やつむらん童四五人

ひる下がり森の樹蔭に汗拭けばほろりほろりと椎の花散る（下句一案）風の薫りて椎の花落つ

何想ふとしもなく森の中雨に濡れつつゆきつもどりつ（森の中 一案）朝の森

勤めんと誓ひても得ず胸痛み机に張れる蜘蛛の糸視つ（深夜遊びより帰りて）

何気なくあやめる虫を掌に置けば心さわぎぬ生命おもへり

へこの年十二月八日、太平洋戦争が始まり、その月末にわたしたちは大学を繰りあげ卒業し、多くは兵役が決定した。原田は第一乙種で現役だったが赤谷君はたぶん第三乙種で予備役だった。

★1942.1.4? 同宛。手紙。原稿にそえたもので、封筒には「原田憲雄兄」と墨書するだけで、日付なし。

原田兄 紳への原稿として奈良の土塀を書きたく思つてゐたが時間もなく、丁度三日の夜本山の法要に出て餅談義を聞いたのを幸ひにして、これを紹介して当座の賞めを果たすこととした、例によつて雑駁な文章とて氣にいられぬところはよき様手を加へられたし、小生今夕帰郷。東京へ行く行かぬにかかはらず八日か七日には一度戻つて来たいと思つてゐる、匆々

★1942.1.15.（消印は16.）田中千美宛。宛先は東京市赤坂区青山南町二ノ一八レディス（洋裁研究所）若葉寮。

『幻の葡萄』第一卷二二二頁。

★1942.1.27.（消印は28.）同宛。封筒墨書。『幻の葡萄』第一卷二二三頁。へこの年二月一日、原田は中部三七部隊に入替した。

★1942.2.26.同宛。手紙。宛先は東京市赤坂区青山南町二の三九川北へ下宿方。『幻の葡萄』第一卷二五二頁以下、原田憲雄を憲雄、田中千美を千美と略称し、巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で、示す。但し『幻の葡萄』、同後記の頁数はそれぞれ通し番号である。なお墨書ペン書きの説明を省き、日付は、有るものは日付、無いものは消印、に従う。

★1942.4.6.同宛。手紙。『幻の葡萄』I 270.

★1942.6.10.憲雄宛。葉書。宛先は豊橋市陸軍教導学校山部隊第三区隊。憲雄は甲種幹部候補生として、五月九日、中部第三十七部隊から派遣され、十月末まで、ここを住所とした。差出し住所は、奈良市五条町、唐招提寺塔中、教学院。赤谷君は、六月から宗務所録事として本山に起居した。『平安学園と私』131 参照

★1942.7.6.同宛。葉書。『幻の葡萄』II 306.

★1942.7.10.同宛。葉書。

土用前の暑さは格別だ 我々でもたまらないから貴兄等尚更の事だらう 時に いやな通知だが (龍大) 国文出身の稲垣へ秋豊君が中支で戦死したさうだ 君等より後で入営した筈だが はかないものだ あの冗談口が未だ聞こえる 君の学校では面会はどうなつてゐるのだ 日曜日にでもできるのか、ついでの時にお知らせ願ひたい 草々

★1942.7.23.同宛。葉書。『幻の葡萄』II 306.

★1942.8.7.同宛。手紙。『幻の葡萄』II 313.

- ★1942. 8. 19. 同宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 316.
- ★1942. 9. 8. 同宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 323.
- ★1942. 10. 1. 同宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 328.
- ★1942. 10. 2. 千美宛。手紙。宛先は京都市左京区松ヶ崎桜木町へ千美は六月東京から帰洛へ『幻の葡萄』Ⅱ 329.
- ★1942. 10. 11. 憲雄宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 330.
- ★1942. 10. 16. 同宛。葉書〈寄書き〉。『幻の葡萄』Ⅱ 331.
- ★1942. 10. 21. 千美宛。手紙。宛先は京都市河原町四条下る寿ビル一階へ千美が妹千章と経営していたレディス洋裁研究所があった。以後、ハハ宛てのは「寿ビル」と注記するへ『幻の葡萄』Ⅱ 332.
- ★1942. 10. 31. 同宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 340.
- ★1942. 11. 13. 同宛。寿ビル。手紙。『幻の葡萄』Ⅱ 344.
- ★1942. 11. 22. 同宛。寿ビル。手紙。『幻の葡萄』Ⅱ 349.
- ★1942. 11. 23. 同宛。寿ビル。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 349.
- ★1942. 11. 27. 赤谷君は岡本和氣子氏と千美と共に大和の室生寺に見学にでかけたが、大雨にあい、奈良県宇陀郡二本松村へ現在の室生村へ向淵の正定寺に東森善城氏を訪へ、一宿。『幻の葡萄』Ⅱ 349-351.
- ★1942. 11. 30. 同宛。葉書。寿ビル。『幻の葡萄』Ⅱ 351.
- ★1942. 11. 30. 憲雄宛。葉書。宛先は京都市伏見区深草中部二十七部隊奥田隊。〈憲雄は、この月の初め、豊橋

陸軍教導学校から、原隊に復帰した。『幻の葡萄』Ⅱ 352.

★1942.12.4.同宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 359.

★1942.12.9.同宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 369.

★1942.12.9.千美宛。葉書。寿ビル『幻の葡萄』Ⅱ 369.

★1942.12.14.憲雄宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 370.

★1942.12.17.千美宛。葉書。寿ビル。『幻の葡萄』Ⅱ 371.

★1942.12.18.憲雄宛。葉書。

拝復 平野（謙三）の宛名は伏見区京都陸軍病院第二内科七番病棟東大一です、昨日久し振りに松浦へ一嶺と
会ひ 一緒に東福寺のおつさん（和尚）にお目にかかった、松浦は女の赤ちやんを儲けた由、昨日は春日若宮の
おん祭、行列は見なかつたが夜の舞楽は見た、覚えてみると思ふが一の鳥居を東へ行つた左側の芝生の高台でだ。
ダ太鼓等が出てゐてなかなかの趣きのもの。

かがり火の燃えのさかりに浮き出づる裸木ありてはぜの大木

★1943.1.15.憲雄宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 後記 53.

★1943.1.29.同宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 404.

★1943.2.7.同宛。手紙。『幻の葡萄』Ⅱ 413.

★1943.2.23.同宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 418.

★1943.2.27.同宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 420.

★1943.3.4.同宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 426.

★1943.3.5-11? 同宛。葉書。

愈々梅も咲いた、昔を想ひ出して又欵やスコップを持ち出して来た。これとは何処までも悪縁があるらしい。一度出て来い、応量坊の庭の面目を更へたから。運動の割りに不眠症が続くので毎晩カルモチンの御厄介になつてゐる。先日〈宮崎〉篤〈三郎〉さん来訪、この十三日には又来る由、その日は〈大塚五郎〉先生も田中〈千美〉氏も来られる筈、二月堂におこもりする事となつてゐる、戯作一首
百坪のにはに杉苔生ひ並らし三坪の家に住まなと思ふ

★1943.3.14.同宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 448.

★1943.3.15.同宛。葉書〈寄書〉『幻の葡萄』Ⅱ 447.

★1943.3.21.千美宛。手紙。『幻の葡萄』Ⅱ 455.

★1943.3.23.同宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 460.

★1943.3.24.憲雄宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 461

★1943.3.30.同宛。葉書。奈良県宇智郡野原町から。『幻の葡萄』Ⅱ 465.

★1943.3.31.千美宛。手紙。野原町から。『幻の葡萄』Ⅱ 467.

★1943.4.8.憲雄宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 493.

★1943.5.4. 憲雄宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 513.

★1943.5.25. 憲雄宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 534.

★1943.6.1. 千美宛。葉書。唐招提寺開山忌の印刷案内状。『幻の葡萄』Ⅱ 531.

★1943.6.9. 憲雄宛。葉書。『幻の葡萄』Ⅱ 547.

★1943.6.14. 憲雄宛。葉書。

昨日青谷へ陸軍病院の結核療養所だったように記憶するに平野へ(謙三)を見舞ったが想像していたよりは元気だった。青谷から八幡へ出、淀の葦生に久し振りの懐を催し、更に大塚へ(五郎)先生、篤さんと共に嵐山を散歩ししみじみと幸福な自分を思った。大塚先生のとこで或は君に会へるのではないかと想つてゐたが叶はず、次の日曜日は君の家へ行く積りだから外出できる様なら会いたい、今日から山積してゐる宗務に手をつけ出した、一週間程はこれにとられるだらう、今月は歌は皆無、しばらく心身の雑事を片づける積り、来月ともなれば少しはすつぱりとした気分になれるだらう、では二十日を楽しみにしてゐる、十四日夜

※前号正誤 第六四号 七頁二行 御来光↓御来光。一〇頁下段九行 chāng → cāng 一三頁上段一行 Gēn ↓

Gēng 同行 hēndí → hēngdǐ へ以上は上原淳道氏の示教による。感謝します。第六五号 一三頁下段一行

hua → huā 第六六号 一頁七行 ※持↓秉持 五頁四行 習字の法↓習字の方 九頁一二行 ※雑物↓夾雜

物 一五行 ※舌↓饒舌

シニティー・フォーラム

1987.5.15.

原田 慶

カット 原田 道子

「市民の広場」という意味だろうか。曜日によって大きなテーマがあり、それにそった内容の講演が用意されている。土曜日は、みんな学問をするのだということで、「学問の窓」が二月から始まった。各講座一回五百円の自由参加、自分の聞きたい話だけ登録もなしに、当日参加できるのである。

どんな演題が並んでいたのか憶えていないけれどその中に、「曼荼羅の話」というのがあり、どの話も一回だけこれだけが例外の二回続きになっていた。一回目は二月二十八日、友達を誘って聞きに行った。午前十時に始まる。少し早めに会場へ行ってみると、広い部屋の椅子が三分の二くらいまでふさがっていて、しいんとしていた。そのうちに席がほとんどうまってしまった。勉強しようという人はこんなにも多いのかと感心していたら、講師がみえて、紹介された。仏像彫刻家で、愛宕念仏寺の住職西村公朝氏である。この方は昭和十六年から現在七十二歳まで、仏像の彫刻と修理を四十六年間続けて来られ、東京芸術大学でも教えて来られた。三十三間堂の観音像千一体のうち、第二次世界大戦に兵隊として行かれた間をはさんで、六百体の修理をされたという。一休ずつに思い出があり、自分の日記を見るようだと言われる。

一回めの話は、蓮華蔵世界観と、密教世界観の入り口までで終わった。

次の土曜日は三月七日である。くもり空の寒い日だった。雨になると困るので歩いて行くつもりだったが、遅

くだったので仕方なく自転車で走って行った。二回めは都合で少し小さな部屋になりますということだったので、入れないかと心配したが、やはりぎっしりと並べられた椅子はもうほとんど空席がなかった。ちょうどまん中ごろに友達が席を取っていてくれたが、みんな早くてこんな所しかあいていなかったという、早いめに出かけて来た人が多かったのだろう。それから待っているうちに十時を二十分くらい過ぎてしまった。係の人が出て来て、先生が急に用事ができて一時間ほど遅れるという連絡がいま入ったので十一時から始めるから待つてほしいという。

何ごとが起こったのかと思ったが、とにかく下のロビーで開かれている写真展を見たりして、十一時に再び部屋へもどって来た。また待つこと十分余り、こんどは責任者の人が出て来た。からだじゅう濡れて光っている、外は雪が降り出していたのである。

「先生はもう随分まえにお宅を出られました、確かにこちらへ向かっておられます。もうそろそろ到着されるかと外へでてお待ちしていたのですか、どうなさったのかまだ見えません。必ずお見えになりますのでもう少しお待ちください。」という。雪は降り続いて部屋の暖房の温度があがったのか暑いくらいになってきた。それから十分ほどしてまた先の人が出てきた。「お食事券をさしあげますので午後一時から始めるといふことにしています。ただけませんでしょうか。」ということになった。ちょっとさわわしたが特別不足をとる人はいない。五百円の聴講料を払ったのだが、五百円の食事券をもらった。申し訳ございませんが足りない分は御自分の財布からお願いします、なんて言っている。お帰りの方はお金を返しますと言わないで、皆に同じものを渡すところに

配慮がみえる。

部屋には十人足らずの人が残ったが、皆どこかへ出て行ってしまった。食事をしに行ったのか、帰ってしまったのかわからないが、あと十分ほどで十二時だった。

雪で自転車に乗れないので、私は近くでも一度帰るわけにもいかず、家へ電話しようと思ってロビーに出ると窓ぎわのソファーにすわった七十歳くらいの男の人が二人、大きな声で話している。話の前後はわからないが、「どこへ行っても、ババアばかりや。じいさんを先に送ってしても気楽なもんやさかい、ちょっとも死によらん。」私は笑い出したような、ちょっと面目ないような気がして、急いで通り過ぎた。どういたしまして、ババアが一人で生きるのは、どんなに寂しくて心細いものか御存じないのでしょいか。

友達も図書館へ本を返しに行ったりしながら、結局私達は食事をせず待っていた。一時少し前になると出て行った人がぼつぼつ部屋へもどって来た。どこかへ用足しに行ってきたのか大きな荷物をかかえている人もある。ほんの何人かは、そのまま席が空いているようだったが、ほとんどの人がもとどりの席についた。今日の会場にはじいさんの方が少し多い。間もなく公朝師がみえて皆ほっとしたような空気だった。

愛宕念仏寺におられるのだと思っていたので、急にお葬式でもできたのかと思ったら、今は住職をゆずって、大阪の千里丘にアトリエを持ち、仏像の彫刻をしておられるのだという。昨晩も午前二時頃まで、比叡山延暦寺の戒壇院の釈迦如来座像の彫刻をしていて、お風呂に入って寝たのがもう四時、朝、目が覚めたら十時だった。大あわてでこちらへ電話をしてからタクシーを呼んだがなかなか来てくれない。電車で行こうと家を出ようとす

るとやっとタクシーが来た。名神高速道路を走ってもらおうと思ったが、大変な渋滞で道路に入ることさえおぼつかない。仕方がないので引き返して阪急茨木駅まで行ってもらって電車で来たのだが、こんなに遅くなって、



み

皆さんおこつてもう帰ってしまったかと思つていたのに、こんなにたくさん待つていて下さつて、何とも申し訳ない、とのことだった。正直に言われれば、おこる人はないが、何とも驚いたことで、みんな公朝師の気持を察してか、ため息と安堵の笑いがこぼれた。

密教と浄土教の曼荼羅や、いろいろな仏像についてスライドを見ながら説明があり、その後、如の世界観や印相についてなど三時三十分くらいまでたっぷり話していただいた。

ほとんど一日をこのセンターですごしてしまつた私達は、少し疲れてそれでもずいぶん満足した。聴講の人の中に「今までに他の人の話を聞いたのとちよつと違う感じがしますなあ。」と言つてゐる人がいたが、具体的にむつかしい言葉を使わないようにして、自分の言葉で話をされるので、私などには、とてもわかりやすいと思つた。

この日のことをいえに帰つて話したら、主人は感心していたが、一緒に行つた友達の後で出会つた時、「それだけひま人ばかりやったということや。」と笑つた。しかし私は、一回目の話を聞いて続きを期待していたから、公朝師を信頼していたから、皆黙つて待つていたのだと思つてゐる。公朝師は着馴れた黒の背広の上下で、実直な感じの方だった。仏像彫刻家という、作業と祈りの積み重ねからくる確かな存在感が、人々を黙つて三時間も待たせたのだと思つてゐる。

それから一ヶ月余り、四月十九日の京都新聞に、「幻の本尊復活」という見出しで、延暦寺戒壇院の釈迦如来座像と、公朝師の顔が写真入りで大きく出ていた。あの遅刻の原因となつた如来像の入仏開眼法要が四月二

十一日営まれた。公朝師は仏像彫刻家として、湛慶と同じ最高位の天台大仏師法印とされたそうである。

東山の国立博物館へ絵巻物展を見に行った時に隣の三十三間堂へ観音様をおがみに行った。機会はいくらでもあったのに、入ったのは初めてだった。千一体の観音様は中尊千手観音の左右と後に、透明な楽の音が響いてくるとおもわれるように静かに並んでおられた。この中の六百体を公朝師が修理されたのだと思いつながら、ゆっくり見て半分くらいまで行った時に、中学生の修学旅行と小学生の遠足の団体が一度に入ってきて来た。小学生は人の間をすり抜けるようにして走りすぎて行く、中学生は仏像の名前を讀んでおもしろがっている。ナラエンケンゴ、ダイベンクドクテン、バソセン、カルラオウなどというのは耳なれないので声を出してとなえる。神母天を見て、「かなわないなねシンバルなんかもってるんだもん。」などと半分感心している。ゆっくりおがみかけたのに押されて、騒ぎにまきこまれて、わるい時に来たなあと思っていたが、生徒の中の一人が、「どうしてこんなに大勢で、こんな所へ来なければならぬんだ。」と言うのを聞いた時、みんな同じなのだ、静かに見たくてもこんな出会いをしなければならぬこともあるわけだ、と気がついた。私はいつでもまた来られる、この人達に出会うことの方が困難なことかもしれない、と思っているうちに外へ押し出されてしまった。外へ出てみれば油のにおい、大きな観光バスの列、制服の警備員、ホイッスルの音、中と外とのこの非常な違いだけは、誰もが体験できる。

背の高い男の子が「先生そこに立って。」と言ってカメラをかまえている。見たらジーンズのスボンをはいた髪の毛の長いお姉さんだった。ああこの人が先生なのかと不思議に感動した。